

「手伝ってくれるのはありがたいが、彼らをあてにしてはいけない」。数年前、東海地方のある地域で町おこしに取り組む男性が、複雑な表情で話していたのを思い出す。「彼ら」ことは大学生のこと。活動に熱心な学生たちが卒業した途端、事業が立ちゆかなくなった

### 目録

### 彼ら

経験があるという。浜松市の山あいにある棚田では、ちよつと様相が違ふ。静岡文化芸術大（同市）の学生団体が「耕作隊」として2016年から米作りを続ける。農家の高齢化で休耕田が増える中、毎年隊員を入れ替えながら景観保護に貢献してきた。

学生たちを初期から支える農家の西本有一さん(77)は「今は教える作業がほとんどない。先輩が後輩に継承している」と見守る。今や地域の会合にも顔を出し、若い意見をくれる貴重な存在。この春も、彼らによる米作りが始まった。

(須江政仁)